

38単位専門看護師教育課程における フィジカルアセスメント教育の実態把握

—各大学院のホームページの検索結果から—

城生弘美^{*1}・池内眞弓^{*1}・森祥子^{*1}・森屋宏美^{*1}・籠谷恵^{*1}・矢口菜穂^{*1}

The reality of the physical assessment education in Certified Nurse Specialist major with 38 credits at graduate school : According to each graduate school home page

Hiromi JONO ^{*1}, Mayumi IKEUCHI ^{*1}, Sachiko MORI ^{*1}, Hiromi MORIYA ^{*1},
Megumi KAGOTANI ^{*1} and Naho YAGUCHI ^{*1}

〈抄録〉

38単位専門看護師教育課程が認定され、共通科目に位置づく「フィジカルアセスメント」該当科目のシラバスをホームページ上で公開している36大学院のシラバス内容を審査基準に照らし分類し、フィジカルアセスメント教育の実態を把握することを目的とした。

科目名で最も多かったのは「フィジカルアセスメント」であり、科目の目的・概要で表記されているキーワードのうち最も多かったものは「複雑な健康問題をもった対象者」「身体状況を診査」「臨床判断」「知識と技術を習得」であった。また授業回数はほとんどが15回で計画され、評価方法は、授業内での討議内容やプレゼン資料内容等の参加状況レポートであったが、筆記試験や実技テストを実施している場合もあった。さらに、高度看護実践（看護師）として、シミュレーション（学習）や模擬患者を通して技術習得を目指していることが示めされた。

Key words：看護系大学院、フィジカルアセスメント、38単位専門看護師教育課程、ホームページ

I. はじめに

2007年12月に厚生労働省医政局長より都道府県知事あてに「医師および医療関係職と事務職員等との間での役割分担の推進について」が提示され、医師と看護師等医療関係者との役割分担をより推進すべきであり、看護師の場合は「薬剤の投与量の調節」「静脈注射」「救急医療等における診療の優先順位の決定」「入院中の療養生活に関する対応」「患者・家族への説明」において、能力を研鑽しその専門性を発揮していくことが示された（厚生労働省、2007）。翌年には、日本学術会議の「信頼に支えられた医療の実現—医療を崩壊させないために—」要望の際に、現在、医師のみが実施し得るとされている

医療行為の一部について、看護師など、適切な教育を受け、必要な知識と能力を有する他の職種に委譲していくことについて速やかに検討すべきで、本当の意味でのチーム医療への体制変換が求められていると明言した（日本学術会議、2008）。これを受けた厚生労働省は「チーム医療の推進について」の検討会報告書において、一般の看護師であっても安全に実施できる医行為として想定される例として「検査等」「処置」「患者の状態に応じた薬剤の選択・使用」の項目に分け明示した（厚生労働省、2010）。以上の経過を経て、2025年問題に向けて「特定行為に係る看護師の研修制度導入」が開始され、その中の共通教育科目に「フィジカルアセスメント」が位置づけられた（厚生労働省、2015）。

一方、日本看護系大学協議会（1976年発足）において

*1 東海大学健康科学部看護学科（Department of Nursing, School of Health Sciences, Tokai University）

1991年から専門看護師教育課程試案の議論が始まった。同時期に日本看護協会における「専門看護師（Certified Nurse Specialist：以下 CNS と称す）」認定制度が検討され、1994年に発足した。その後、両者の協議により、日本看護系大学協議会が CNS 教育課程の基準を作成し、協議会に所属する看護系大学院の修士課程のうち CNS 教育課程の基準を満たした大学院を承認し、日本看護協会が CNS 認定試験を実施し審査することとなった。さらに、2012年にはそれまでの26単位の CNS 教育課程に代わり、ケアとキューの実践力強化に向け共通科目 B として「フィジカルアセスメント」「臨床生理学」「臨床薬理学」を設けた上、実習単位を増加した38単位 CNS 教育課程を開始した（日本看護系大学協議会、2017）。

以上のような社会情勢の変化や少子高齢化に伴う複雑な健康問題を持った身体状況を抱える対象者の増加に伴い、看護実践力においても高度な「フィジカルアセスメント」の基礎的能力は欠かせないものであるということが、一般的な認識になってきたと言える。しかし、より高度な看護実践にむけた「フィジカルアセスメント」の基礎的能力とはどのようなレベルであり、その教育効果はどのように現れているかについての議論は始まったばかりである。

フィジカルアセスメントに関する研究は、看護基礎教育に導入されたフィジカルアセスメント教育の内容や講義時間、科目担当者の苦手意識や知識不足の実態、講義演習の組み立てに苦慮しているという実態の研究が多かった（安達、2004；今本ほか、2004；金谷ほか、2006；丹ほか、2004；篠崎ほか、2006；横山ほか、2003；山内ほか、2007；横山ほか、2007）。また、教育内容に対しては、ミニマムエッセンシャルズの検討（Shinozaki & Yamauchi, 2009）や看護師が呼吸器系フィジカルアセスメントの基礎教育に求める内容（篠崎ほか、2013）に関する調査研究等がみられた。一方、高度な看護実践者である脳神経リハビリテーション認定看護師が脳神経フィジカルアセスメント教育に求める内容を明らかにした研究（加藤・山内、2015）がみられた。しかし、CNS が捉えるフィジカルアセスメント教育に関する研究はほとんどない。

そこで本研究は、38単位 CNS 教育課程における共通科目 B に提示されたフィジカルアセスメントの該当科目について、各大学院のホームページで公開されているシラバス内容を分析し、フィジカルアセスメント教育の実態を把握することを目的とする。この目的を達成することにより、CNS 教育課程におけるフィジカルアセスメント該当科目について、より具体的な教育内容に関す

る知見が得られることを目指す。

Ⅱ．研究方法

1. 対象

一般社団法人日本看護系大学協議会における「高度実践看護師教育課程審査基準」（2017年2月現在）において共通科目 B 審査基準で定められている「フィジカルアセスメント2単位」「病態生理学2単位」「臨床薬理学2単位」の科目をいれた38単位 CNS 教育課程申請が認められている69大学院のホームページで公開されている「フィジカルアセスメント」の該当科目のシラバスを探索した。そのうち、共通科目の位置付けが不明のもの、科目名のみ表記あるいはシラバスが見つからなかった大学院を除いた36大学院を本研究の対象とした。

2. 用語の定義

「フィジカルアセスメントの該当科目」とは、各大学院の38単位 CNS 教育課程に使用されている共通科目 B の「フィジカルアセスメント」に相当する科目名全般を示す。

3. 調査方法

38単位 CNS 教育課程が認定され、カリキュラム構成上、共通科目に位置付き「フィジカルアセスメント2単位」に該当する科目のシラバス内容について、授業科目名・概要・単位数・授業目標などについて各大学院ホームページを検索した。

4. 分析方法

「フィジカルアセスメント2単位」に該当する授業科目名について、標榜されている科目名を列举した。科目の授業目的や概要で説明している内容については、38単位 CNS 教育課程共通科目 B 「フィジカルアセスメント」の審査基準である「複雑な健康問題をもった対象の身体状況について系統的に全身を審査し、臨床看護判断を行うために必要な知識と技術について教授する科目が設けられていること」にしたがい、授業概要、目的欄に表記された文章中に書かれているキーワード表記が繰り返されている場合は、標記回数を述べ回数としてカウントした。また、授業計画に関しては、授業回数について列举した。さらに、評価方法については、各大学院により表現が微妙に異なるため、講義演習を含んだ授業への参加状況、筆記試験、実技テスト、レポートの4つに大別して分類した。参加状況とは講義演習中の討議内容、

表1 共通科目「フィジカルアセスメント2単位」の科目名について n=36

科目名	大学院数
フィジカルアセスメント	22
フィジカルアセスメント特論	3
フィジカルアセスメント論	2
フィジカルアセスメントⅠ	1
フィジカル・アセスメント	1
フィジカルアセスメント学	1
臨床診断学(フィジカルアセスメント)	1
看護ヘルスアセスメント	1
ライフスパンフィジカルアセスメント	1
アドバンストフィジカルアセスメント	1
アドバンスト・フィジカルアセスメント	1
高度実践フィジカルアセスメント論	1

発言内容、プレゼンテーション資料作成やその内容を含むものとした。

5. 倫理的配慮

本研究は東海大学健康科学部倫理委員会の承認（第16-30号）を得て行った。

Ⅲ. 結果

1. 概要

38単位 CNS 教育課程申請認可状況は、2012年度16大学院、2013年度13大学院、2014年度13大学院、2015年度15大学院、2016年度12大学院、計69大学院であった。このうち、共通科目 B に位置付けられたフィジカルアセスメント該当科目のシラバスをホームページから検索したところ、69大学院のうち36大学院、約6割の資料が得られた。

2. フィジカルアセスメントの科目名について（表1）

もっとも多かった科目名は「フィジカルアセスメント」22大学院で標榜していた。「フィジカルアセスメントⅠ」「フィジカル・アセスメント」という科目名もあった。次に「フィジカルアセスメント特論」3大学院、「フィジカルアセスメント論」2大学院であった。この他に「看護ヘルスアセスメント」「ライフスパンフィジカルアセスメント」「フィジカルアセスメント学」「アドバンストフィジカルアセスメント」「臨床診断学（フィ

ジカルアセスメント)」「高度実践フィジカルアセスメント論」が各1大学院であった。

3. フィジカルアセスメント科目の目的／概要に表記されたキーワードについて（表2）

38単位 CNS 教育課程の共通科目 B の審査基準に示されている「複雑な健康問題をもった対象の身体状況について系統的に全身を審査し、臨床看護判断を行うために必要な知識と技術について教授する科目が設けられていること」にしたがい、表2のように分類した。「複雑な健康問題をもった対象」については、そのほとんどが審査基準通りであった。その他のキーワードとしては、様々な健康問題あるいは多様な健康問題であった。「系統的に全身を診査」については、「身体状況を診査」が10件で最も多く、次に「身体・精神状態を診査」3件、「包括的な診断法」「身体状態を系統的に診査」「身体のアセスメント」「系統的に診査」各2件であった。その他のキーワードが9件あった。「臨床看護判断」については、「臨床判断」17件が最も多かった。次に審査基準通りの「臨床看護判断」8件、「臨床推論」「高度なアセスメント能力」「臨床看護診断」「臨床判断能力」が各2件、その他のキーワードが10件あった。「知識と技術」については、「知識と技術を習得」が10件、次に「フィジカルイグザミネーション技術」5件、「必要な知識と技術」3件、「技能知識を習得」「知識と包括的なフィジカルアセスメント技術」が各2件であった。その他のキーワードが16件あった。「その他」については、高度

表2 「フィジカルアセスメント」該当科目の目的/概要に表記された審査基準*に照らしたキーワード

審査基準	キーワード	表記の延べ数
複雑な健康問題をもった対象	複雑な健康問題をもつ(もった)対象	26
	生活の要素やwell-beingの観点	1
	様々な健康問題をもった対象	1
	様々な疾患の早期発見・予防	1
	様々な病態を呈する症例	1
	複雑な健康問題の発生	1
	多様な健康問題をもつ患者	1
系統的に全身を診査	身体状況を診査	10
	身体・精神状態を診査	3
	包括的な診断法	2
	身体状況を系統的に診査	2
	身体のアセスメント	2
	系統的に診査	2
	身体の状態	1
	身体診察	1
	身体状況を的確にアセスメント	1
	診察および診断法	1
	全身状態を把握	1
	包括的な健康病歴聴取	1
	包括的なフィジカルアセスメント	1
	組織的・系統的な身体診査	1
	系統的全身を診査	1
臨床看護判断	臨床判断	17
	臨床看護判断	8
	臨床推論	2
	高度なアセスメント能力	2
	臨床看護診断	2
	臨床判断能力	2
	判断の根拠・用い方	1
	正常・異常についての総合的判断	1
	鑑別診断	1
	臨床評価	1
	包括的な健康状態の評価	1
	検査結果の評価	1
	適切な看護を判断	1
	包括的に判断	1
	正常異常の判断能力	1
	包括的に臨床病態および健康問題を把握する能力	1
知識と技術	知識と技術を習得	10
	フィジカルイグザミネーション技術	5
	必要な知識と技術	3
	技能知識を習得	2
	知識と包括的なフィジカルアセスメント技術	2
	知識に基づいた技術	1
	知識と方法を学ぶ	1
	フィジカルイグザミネーションの所見	1
	知識と診断法	1
	知識を深め、技術を習得する	1
	知識を統合	1
	高度な知識・技術の習得	1
	フィジカルアセスメントの技能	1
	フィジカルアセスメントを的確に実践	1
	実践する方法を習得	1
	診察技術	1
	知識・思考と技術の能力	1
	質の高い看護実践	1
	看護実践を導く	1
	知識に基づきフィジカルアセスメントに必要な技術	1
	高度な看護実践	1
その他	高度看護実践(看護師)	6
	専門看護師	3
	シミュレーション(学習)	6
	模擬患者	2
	デモンストレーション	1

*審査基準: 一般社団法人日本看護系大学協会による「高度実践看護師教育課程診査基準(専門看護師38単位) 共通科目B診査基準「フィジカルアセスメント」の基準を示す

表3 共通科目「フィジカルアセスメント
2単位」該当科目授業回数 n=36

授業回数	大学院数
15回	30
16回	1
20回	1
23回	1
不明	3

表4 共通科目「フィジカルアセスメント2単位」該当科目の評価方法 n=36

評価方法の大別	科目数
・参加状況(討議内容、発言、プレゼン資料作成内容等) ・レポート	24
・参加状況(討議内容、発言、プレゼン資料作成内容等) ・実技テスト ・レポート	5
・参加状況(討議内容、発言、プレゼン資料作成内容等) ・筆記試験	2
・参加状況(討議内容、発言、プレゼン資料作成内容等) ・実技テスト	2
・参加状況(討議内容、発言、プレゼン資料作成内容等) ・筆記試験 ・実技テスト ・レポート	1
・不明	2

看護実践（看護師）、専門看護師や技術習得方法としてのシミュレーション（学習）や模擬患者、デモンストレーションが示されていた。

4. フィジカルアセスメント科目の授業計画について (表3)

授業回数は15回で計画されているものがほとんどであった。最も多かった回数は23回であった。

5. フィジカルアセスメント科目の評価方法について

(表4)

36大学院のフィジカルアセスメント科目の評価方法については、様々な表記がなされていたが、大別すると表4に示すようなものであった。評価方法としては、授業（講義と演習を含む）への参加状況（討議内容、発言、プレゼンテーション資料作成やその内容）、レポート、筆記試験、実技試験等により行われていた。最も多かった評価方法は、授業への参加状況とレポートにより評価をしているもので24大学院であった。次に多い評価方法は、参加状況と実技テスト及びレポートによるものであった。どの評価においても、参加状況（討議内容、発言、

プレゼン資料作成内容等)は共通する評価方法であることが示された。

IV. 考察

わが国における CNS 教育は、ケアとキューの実践力強化に向け共通科目審査基準 B で示された「フィジカルアセスメント 2 単位」「病態生理学 2 単位」「臨床薬理学 2 単位」の 3 科目と実習単位増加を加味した 38 単位教育課程が 2012 年度より開始され、2018 年度より全ての CNS 教育課程において 38 単位で教育をすることとなった。そのため、既に 38 単位 CNS 教育課程を運用している各大学院のシラバスについて、科目名、授業の概要・目的、授業回数、評価方法について横断的に分類した。科目名はそのほとんどが「フィジカルアセスメント」を標榜していたが、「アドバンストフィジカルアセスメント」や「ヘルスアセスメント」といった看護基礎教育での科目との違いを表記している科目名もあった。

加藤ほか(2015)が脳神経リハビリテーション認定看護師を対象にした「脳神経のフィジカルアセスメント」に関する教育内容の要望を把握したところ、看護師がすべてを実践しなくても他職種からの情報を得て判断する項目も多いことを示している。このことは、フィジカルアセスメントの基本的知識をもつことの必要性和他の専門職者からの情報を的確に把握できること、得た情報と看護師自身が把握した情報の関連性を考察し判断できる力を持つことの重要性を示唆していると考えられる。

また、本研究のフィジカルアセスメント科目の目的・概要に記載されているキーワードを審査基準に照らし分類したところ、「知識と技術」に関連するキーワードが最も多く示されていた。このことは、どのような知識を、どのような技術を、CNS を目指す院生に習得してほしいと考えているかに対し、各科目担当者の意図が多様であることを示していると考えられる。また、「系統的に全身を診査」するについてのキーワードについては、「系統的」に変わるキーワードとして「包括的な」あるいは「身体・精神状態」「組織的」で表記されていたが、対象者全体をバラバラではなく、根拠をもってアセスメントするという考え方が示されている。また、臨床看護判断についてのキーワードでは、「臨床判断」が最も多く用いられており、類似した表現としては「臨床判断能力」「正常異常の判断能力」「正常異常についての総合的判断」「臨床推論」「鑑別診断」「臨床評価」があった。CNS にどのような能力を目指しているかに関する担当者の意図が伺える。

以上のことから、授業の概要・目的に示されていたキーワードを多いもので繋げてみると、「複雑な健康問題をもった対象者に身体状況を診査し臨床判断をするために、知識と技術を習得する」科目となり、「看護」が顕在しない表現になった。CNS の能力として、身体状況の診査ができ臨床判断ができることのみならず他の専門職者からの情報を効果的に得る能力も重要であるため概要・目的として、改めて「看護」を顕在化する表現や内容が必要ではないか、と考える。具体的な授業計画は、そのほとんどが 2 単位 15 回で組まれており、講義科目扱いで授業が組まれていることが示された。また、評価方法として、シラバスに記載がなかった 2 大学院以外は、授業での討議内容、発言内容、プレゼンテーションの作成やその内容等で行っていることが共通していた。高度な看護実践者に求める能力として、どの大学院においても主体的な学習者としての能力を評価していることが示された。加えて、レポートや実技テストを実施したり、筆記試験を実施したりしている場合もあり、多側面から評価をしている大学院もあり、フィジカルアセスメントに関する知識に加え、実技やレポートを課し、実技に重きを置いて展開していることが伺われた。

V. 今後の課題

本研究において、公開されている大学院ホームページから得られたシラバス内容について審査基準に照らして概観したことにより、CNS 教育課程でおこなわれる「フィジカルアセスメント」がどのようなキーワードで概要・目的が示されているかが見えてきた。審査基準でも示されていた「複雑な健康問題をもった対象者」の複雑な健康問題について、どのような設定をした教材を用いているか、時間配分はどのようにして実施しているか、どのような知識が複雑な健康問題をもった対象者に対応可能なものか、またどのような技術を習得すべきか等について、各大学院で工夫をしながら展開している状況が伺えた。しかし、より具体的な方法等については、シラバス記載内容だけでは読み込めない状況であった。15 回の授業展開の中で教材の検討は大変重要であるし、教育展開方法も工夫をしなければ修了しない。CNS の能力として、複雑な健康問題をもつ対象者に対応できる「フィジカルアセスメント」とは、何をどこまで、どのように、といった具体的な教育内容と教育方法の情報を得ることにより、求められる「臨床看護判断」能力の具体的事項を検討する必要がある。

引用文献

- 安達祐子（2004）：PBL テュートリアル教育でおこなったフィジカルアセスメントの学習の成果—3年間の学習態度評価と実技評価—、日本赤十字武蔵野短期大学紀要、第17号、1-6.
- 今本喜久子、北村文月（2004）：解剖生理学を基盤にしたフィジカルアセスメントの看護学教育への導入、形態・機能、3（1）、7-16.
- 金谷悦子、村上みち子、山下暢子ほか（2006）：看護基礎教育におけるアセスメント技術教育研究の動向 過去25年間のフィジカルアセスメント技術教育研究に焦点をあてて、群馬県立県民健康科学大学紀要、第1巻、35-49.
- 加藤広美、山内豊明（2015）：デルファイ法による脳卒中患者に必要なフィジカルアセスメントの検討（第一報） 脳神経に焦点をあてて、日本看護科学会誌、35巻、82-89.
- 厚生労働省（2007）：医師及び医療関係職と事務職員等との間等での役割分担の推進について（通知）、平成19年12月28日、医政発第1228001号.
- 厚生労働省（2010）：チーム医療の推進について（チーム医療の推進に関する検討会 報告書）、平成22年3月19日.
- 厚生労働省（2015）：特定行為研修とは
<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000077114.html>.
- 日本学術会議（2008）：要望 信頼に支えられた医療の実現—医療を崩壊させないために—、平成20年6月26日.
- 日本看護系大学協議会（2017）：平成29年度版 高度実践看護師教育課程基準 高度実践看護師教育課程審査要項、189-195.
- 篠崎恵美子、山内豊明（2006）：看護教育研究 看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育の現状 2005年度看護・看護系大学の全国調査より、看護教育、47（9）、810-813.
- Shinozaki, E., Yamauchi, T.（2009）：Nursing competences for physical assessment of the respiratory system in Japan, Nursing and Health Sciences, 11（3）、285-292.
- 篠崎恵美子、山内豊明（2013）：臨床の看護師が求める基礎教育でのフィジカルアセスメント教育 呼吸に焦点をあてて、医学と生物、157（4）、444-449.
- 丹佳子、田中愛子、川嶋麻子ほか（2004）：基礎看護学実習Ⅲにおける学生のフィジカルイグザミネーション実施状況 教員の必要性の判断からみた実施率、山口県立大学看護学部紀要、8号、33-40.
- 山内豊明、三苫里香、志賀たずよ（2003）：訪問看護実践に必要なとされるフィジカルアセスメントについての現状調査、日本看護医療学会誌、5（1）、35-42.
- 横山美樹、小澤道子、香春知永ほか（2003）：基礎実習におけるフィジカルアセスメント技術、基礎看護技術の実態、聖路加看護大学紀要、29号、40-46.
- 横山美樹、佐居由美（2007）：看護師のフィジカルアセスメント技術の臨床現場での実施状況 フィジカルアセスメント開講前後の卒業生の比較からみたフィジカルアセスメント教育の検討、33号、1-16.